パネルディスカッション

モデレーター　竹中千春（立教大学アジア地域研究所所員、法学部教授）

弘末：それでは、これから総合討論に移らせていただきます。

竹中：それでは報告者の方、前にお願いいたします。今日は1日立教大学で、私もそうですが、勉強させていただいてありがとうございます。皆さんも最後まで頑張っていただいてありがとうございます。総括討論の司会をいたします立教大学法学部の竹中です。専門は国際政治、インド政治をしているので、この21世紀海域学のプロジェクトではインド大陸を中心とする海の時代というのを政治的に、そして国際政治的にどう切り込むかというのを研究しているインド洋チームのリーダーをしています。よろしくお願いいたします。

今日は全体の構成としましては、この21世紀海域学に歴史から切り込むという方々。また文化人類学を中心としながら観光学も含めて文化から切り込むという方々。そして、またアジア太平洋、アフリカと地域研究という呼び名で言っていますが、地域エリアを中心に巻き込んでいくというような専門領域から今回のテーマに切り込んでいただいたと思います。政治とか国際政治というようなややきな臭い領域からの海域学というよりは、15世紀、16世紀から21世紀までの歴史、そうした長い時間を踏まえて、ほとんど世界中がお話しに出て来ました。今日出て来なかったのは南極とかラテンアメリカ。そして、ふつう世界史でよく出て来るヨーロッパや北米はあまり出て来なかったという不思議な、面白い組み込みでした。それぞれの報告書の方も非常に個性的な切り込みの中で海域、社会、そして人々というテーマに、さらに加えてそれらが移動する、移動しない、定住している、国があるといったようなテーマを報告していただいたと思います。

これからの進め方ですが、舵取りとしては少しテーマを絞りたいと思います。本プロジェクトは「21世紀海域学の創成」という大きなテーマを掲げていますので、何か創成したなと思って今日皆さんに帰ってもらえたらいいなと思っています。そこで開会挨拶で弘末先生が一番目の問題として挙げられましたAとBをキーワードとして発言、議論していただき、海域学的なテーマの共通項を得たいなと思います。

若干説明しますと、Aは「出身地と外部世界とのネットワーク形成、海域世界の秩序形成」で、世界的で地域的なネットワーキングと海の世界というのはどう考えられるか。Bは「地元社会の秩序形成」です。そういうもののつながり口となる地域には、エスニックや宗教や言語をミックスしたような港市、要するに窓口、入口ができる。そういう結節点と、移動がない部分もあるんですけれども地域、現地、あるいは地元、土着という言葉もありますが、そうした社会というのが、どういうふうな形成のされ方があるか。

弘末先生が2番目として挙げられた問題に、どのような思想や宗教などが国際秩序として展開したのか、というものもありましたが、これは時間的に十分議論できないかもしれませんが、ネットワーク形成と海の世界という問題とそれから入口、そして入口がある陸地の世界、社会というのをビビットに考えていきたいと思います。

政治学をやっている私からしますと、米中関係や日中関係など、だいたい陸地に国家があって国民が定住しているという前提で議論していますので、陸地の話ばかりになります。そうではない海、移動する、ネットワークということについて、お一人ずつ今日一番言いたかったことをこの概念にすり寄せていただいてお話をうかがいたいと思います。では重松先生から。

重松：アルメニア人は非常に小さなネーションですが、彼らから学ぶところは大きいと思います。東インド会社との関係でも、アルメニア人の交易活動とは、基本的には武力を持

たない。武装商船をもたなかった。国際政治には直接に関与しない。現地の様々な政治状況や様々な宗派にはコミットしないということをおそらく一貫してやってきたのではないかと思います。

例外もあります。オスマントルコとの関係です。1910年代のホロコースト。これは彼らが周辺の国家から受けた迫害です。彼ら自身の国家権力の拡大の結果ではなくして、一種の民族的なサバイバルであったと思います。生きる知恵としての交易の手法、交易のシステム、彼ら自身の小さなファミリーベースのコミュニティの活動を行っていたんではないかと思います。

竹中：ありがとうございます。太田先生お願いします。

太田：A、B2つの角度は、私は非常に密接に結びついていると思います。外部ネットワークを積極的につくっていくのは今日の私の話ですと海洋移民であるわけですけれども、彼らは定住先で地域社会やその受け入れ効果とも密接に関わりを持っていて、私は必ずしも2つに切り離された概念ではないと思っています。

それから、そういった外部の影響を受けて受け入れ先がどのように変容したかということを語るときは、外部からのインパクトをある一時的なものと捉えたり、外から内部に異質なものが来ると認識したりしている印象を受けます。私の今日の話の登場者たちですと、もともと移民であった住民がさらに別の移民を受け入れたり、さらに別の地へ移動したりすることもあります。そうすると、ある社会における変化は常に外から中へ入って来るものでも、あるいはある特定の時期に起こるというものでもなく、ずっとそういうものが時間的にも連続しているようにも思います。それほど直接的に外に出て行かなかった集団の場合でも、彼らもやはり外部ネットワークが発達したことによって外部の必需品を受け入れ、生活様式を変え、おそらく人口も増えていると思います。このような人の移動と、それに伴う異なる社会の接触が生じるところで、南西カリマンタンや島嶼部東南アジアの重要な歴史的展開があるのではないかと考えています。

竹中：ありがとうございます。では弘末先生、海についてぜひぜひ先生のご持論をお願いします。

弘末：AとBのところですが、私もこれは太田先生のお話と同じく、媒介的にとらえることの重要性を考えております。外来者と一緒に暮らした現地人女性とかその子孫の混血者たちは、海域世界のネットワークづくりと、地元の社会統合の双方に関わったという意味で、媒介的な役割であることを私自身言いたかったところです。彼らは双方に関わるわけですが、先ほどの重松先生のお話は非常に面白く聞かせていただきました。そうした社会統合にほとんど関わらないでやっていく方法もあったのだということを、改めて考えさせられました。そうなると確かにファミリーネットワークを徹底的に小規模に守っていくことが、重要になります。吉原先生のお話とも関連しているかと思いますが、そういう世界が生まれてくることを、認識させられました。以上です。

竹中：ありがとうございます。では太平洋、豊田先生どうでしょうか。

豊田：今日、ほかの方のお話をうかがっていて思いましたのは、地域によって異人と外来者に寛容な社会があるかなということです。異人や外来者が何かを外からもたらしてくれるようなイメージを持っている社会があるのかなということです。先ほど休憩の時間にお

話しした事ですが、例えば日本では「まれびと信仰」というのがありますけれども、そういうものと重なるものがある社会があるかなということを思いました。それとの関連で、弘末先生のお話で出てきた現地人の妻妾、妻とお妾さんですか、これを可能にするような状況について私は興味がありまして、どんなところでもそうなるわけではないだろうと思っています。太平洋でいいますと、ポリネシア、ミクロネシアというのは、それに近いかなと思いました。

ただ、このへんはよく分からないというか、非常に言うのは難しいのですけれども、言われているのは、わりと性的に緩やかな社会とか色々な表現がありますけれども、そういう場所がどこかにあるというのが言われている一方で、しかしそれは外部からつくられたイメージではないかということも言われています。いわゆる「南海の楽園」のようなイメージですね。そこに行くと何かきれいな女性がいて歓待してくれるのだとかいうようなイメージがあります。しかし、もしかしたらそれは創られたイメージかもしれないということも含めて考えたいと思いました。

途中で話題になった雑婚という言葉に関しては、私もちょっと疑問に思っていまして、じゃあ括弧付きで通せばいいかなと、そういうものでもないかもしれないので、適切な表現を考えていただいたらいいかなと思いました。とりあえず以上です。

竹中：ありがとうございます。さっきの話で言えば、逆にいろいろ動く人を緩やかに歓迎する社会がある地域、それを必要とする地域。そうするといろんな文化的な社会的関係の構築みたいなものも違ってくる。それが女性と男性の関係になることがあるということかもしれません。はい。何かゴーギャンの絵とか思い浮かべちゃいますけど。では、山口先生お願いします。

山口：自分の話では、AとBのどちらかと言えば、Bの地元社会の秩序形成のほうだと思います。Aに関しては、インドネシアのアラブ系住民も第二次世界大戦までは出身地であるハドラマウトとのつながりを比較的維持していましたが、それ以降国民国家が形成されてしまうと、そこでは外来者があまり受け入れられなくなるということもあって、新たに移住することも少なくなり、移住した者たちも出身地とのつながりが切れてしまいます。特に今回とりあげたPAIという団体は、インドネシア・ナショナリズムを掲げ、完全に出身地とのつながりを切ってしまいました。その上で地元社会の秩序形成に積極的に関わろうとした動きであったと考えています。

重松先生のアルメニア人の例とは違って、インドネシアのアラブ人の場合はやはり現地の女性と結婚します。さらに、宗教も同じであることから、現地社会との結びつきが必然的に強くなります。さらにアラブ人は、一度定住すると出身地に帰ることが少ない傾向にあります。そのため、どうしても地元社会との関係が重要になってくると考えられます。

竹中：今グローバルなイスラームという問題に対してすごい関心が寄せられています。そしてまた一番注目されているところなんですけれども、むしろ山口先生がおっしゃったあたりは、アラブの方がインドネシア化するというか、その中に統合されていくぞという力がむしろ強かった時代というふうに考えてよろしいでしょうか。

山口：そういう人たちが出て来た時代と言えるでしょう。

竹中：逆に中東との結びつきやアラブ主義など、そうでない部分もあったということですか。

山口：はい。今回の取り上げたPAIの指導者であるバスウェダンの孫は、現在インドネシアの教育文化大臣をしていますが、穏健なイスラーム解釈の立場をとる人です。もちろんそうでなく、アラブ系の人々の中にはかなりラディカルな人もいました。しかし、このPAIの活躍した時期にアラブ人の中で、穏健でかつナショナリズムに寛容な立場のイスラームの流れが出て来たと言えます。

竹中：つくられた時代。

山口：はい。

竹中：分かりました、ありがとうございます。続いて吉原先生ですが、先ほど吉原先生のときに質問ができなかった方から質問をいただきたいと思います。

フロアA：先生のお話は、タイの社会が求心力を強めていく過程で、やはり華人のグループでも組織強化の取り組みがあった。そういう時代のお話であったと思うのです。それが今、やはりタイ自身も非常に政治の混乱もあり、あるいは王室の求心力がなくなり、さらに経済のグローバル化という動きがあり、また、世代の若返りもあり、非常に遠心力の強まっている時代でもあるわけです。それが海域学と今日の他のテーマについても私が聞きたいところでもあります。やはりグローバル化の中でそれを見ていく意味みたいなものについて、またいろんな地域の共通点もいろいろ見出していけるのかなと思いました。

竹中：今日の吉原先生のお話ではグローバル化を踏まえながらですが、新しい21世紀的な栗田先生の視点からどう考えるかということをご質問いただきました。では、吉原先生お願いします。

吉原：弘末先生のAにつながる質問であったので一緒に答えさせていただきます。出身地や外部世界とのネットワーク形成で、これはもう華人が非常に得意とするところでありまして、最近といいますか80年代以降の改革開放以降は、華人の世界レベルの団体、あるいは懇親会という形で組織やネットワークをつくっています。潮州人、広東人、福建人、客家もそうですが、いろいろな方言別の団体が世界中で同郷組織をつなぐ会議を開くんですね。会議を開くといっても挨拶のほかは主たるイベントは会食です。会食をして、とにかく知り合いになる。これが情報収集とかネットワークを広める非常に重要なことだと考えていますんで、中国人や華人はどんな小さな団体でもまず食事をして、そこで知り合って仲良くなる。そして、信頼関係が構築されていくスタートができるというふうに考えているようです。ですから、このようなネットワーキングを非常に一生懸命やっていて政府も何かしらバックアップをしているようです。

それから、Ｂのほうについては、港市というのはちょっとあまり関わらないかもしれませんが、バンコクとかもっと河口の上にあるアユタヤというのは昔そういうふうな性格があったかもしれませんが、私はあまりよくわかりません。先ほどもある程度は触れましたが、地方に行けば行くほど現地社会に定住していく傾向が強くて、現地の人と結婚する。そういうふうなことがあると思うのです。さらに華人は例えば自分の娘は中国人のところへ嫁がせたいというふうに親は強く思っているようで、裕福な階層はそういうふうにできるんですけど、そうじゃない場合はタイ人の女性を嫁にもらったほうが楽であるということがあるので、通婚は頻繁に見られます。それから自分がまず現地語を覚えるということです。タイ語を覚えて、そして名前も中国風じゃなくて中国風の名前ももちろん持ってい

ても、タイ語表記のタイ人の名前を持つということをやって現地化していくということがあります。そして、外来者として現地社会に受け入れられるということでしょうか。

関係形成ということにつながるのでしょうけど、例えばタイでは国王とか首相とか軍とかが自然災害の被害者がたくさん出たとかインドシナ難民が押し寄せたときには、外国人が入って来て難民キャンプができます。そういったところに国王とか首相とか軍の幹部が見舞って支援するわけです。そのときの資金を華人のいろんな団体が寄付するというのがあります。これは資料ではっきり確認できます。それから、もう1つはタイは仏教国です。そして国王が非常に尊敬されています。ですから、中国系の団体であったとしても仏教、すなわちタイの南伝仏教に対する強い関心があり、それから国王に対する崇敬の念というのが非常にしっかり表明されています。両陛下の写真を飾っていたり、今日はそういう写真を見せられませんでしたが、とにかく一時期タイのナショナリズムの嵐が経済開発の時代に吹き荒れたときに中国人はちょっとつらい思いをしたというのがあって、タイのナショナリズムを十分意識して対応しているかと言えると思います。

竹中：ありがとうございます。さっき重松先生が、アルメニア人はいいことをして、そこに置いてもらえるように頑張ったんだと話されましたが、タイもやっぱり中華系の方でそうだったということですね。では、栗田先生お願いします。

栗田：今日の私の話は、このA、Bで圧倒的にAのほうを強調していたと思います。Bのほうで今回舞台になった広州でも、あるいはバンコクでもジャカルタでも、これらの土地にアフリカ人がいるだけでなくて、ほかのさまざまな人も生活しています。とくに広州にはアラブ系、日系、インド系、あるいはアフリカの人でもクシ系というか北アフリカの人もたくさん住んでいます。各所で異なる文化をもった人びとが接触して、軋轢と触発が同時に起こっています。それを鳥瞰的に、相対的に見ることも必要でしょう。

Aを強調することによって今日の海域世界、私の場合は海域というよりは空を結んでの紐帯なのですが、一帯の地域が結ばれる様相が明示できると思います。

東南アジア各地にアフリカ人が住んでいますが、東京在住のタンザニア人が広州に中古自転車を買いに来る、あるいは香港在住のタンザニア人が広州に自動車のフェイクの部品を探しに来るなどの例があります。タンザニアと広州という2カ所を結ぶだけではなくて、アジア地域をぐるぐる回りながらお互いに接触を繰り返している図をさらに的確に示したいと思います。

竹中：ありがとうございます。ぐるぐる回るというのもそうですし、いろいろな主体がいろいろな形で結びついたみたいにしているというのもきっとそうです。同時に、どちらかが移民、あるいは動く人を輸出しているだけではなく、回流している。今日栗田先生の話ではいっぱい回流していて、それだけではなく中国の人もアメリカに行って、アメリカの人も中国に行っているというような、そういう現在の状況というのも世界を考えるときに面白い観点だなと思います。AとBというのは切り離せないというのが答え、よく分かりました。時間も無くなってきたので発言したい方はどうぞ。

重松：先ほどの海域への進出についてですが。なぜアルメニア人が海に向かったのか。16世紀までは、ご承知のようにアルメニアの交易商人というのは、巡回商人として中央アジア、いわゆるシルクロードからロシアの地域に展開していた。ところが、17世紀以降いわゆる近代国家という領土概念、領域概念が強く出て来る中で、少数民族であるアルメニア人が生きていくのは国境のない、ボーダーレスのところです。海域とは言いますけれども、海はボーダーレスのはずです。そして、海域にはピンポイントの港がある。交易活動

を国家的領域が強くなった大陸から、点と点を結ぶ海に向かっていったのも一つの状況ではないか、と私は考えております。

アルメニア人の経営しているホテルは多くて、ラッフルズホテルやE&Oホテル、それにストランドという名前のホテルも多い。ご承知のようにストランドというのは、浜に乗り上げるという意味のほかに、とも綱、模合いという意味もあります。意図的かどうか分かりませんけれども、アルメニア人が経営しているホテルの中にストランドホテルという名前があって、これは彼らの存在形態と活動を象徴するようなキーワードではないかと私は思います。

竹中：ありがとうございます。航海術とかもその時期に大きく関係したのかなという気がします。面白いですね。

吉原：アフリカ人が中国へ来て広州には100人ぐらいが定住しているというお話がありました。しかし、何か会う場所があるようですが、彼らが相互扶助とか情報交換のための組織や団体をつくるということはお話に出なかったのですけども、私は非常に不思議に思いました。なぜかというと中国人が100人もいたら必ず組織はできています。私はカリフォルニアやロサンゼルスでインドシナから来た中国系難民の組織を調べたことがあるのですが、だいたい20人もいたら必ず誰かがそういう組織を立ち上げるのです。相互扶助の組織をつくる。そしてお寺もつくるということしているのですが、アフリカ人とか、あるいはほかの民族集団の出身の人は、中国人とやっぱりそのへんが違うのかもしれないということをとても興味を持って聞きました。

栗田：私は東アフリカでタンザニア人がマラウィやザンビア、南アフリカに行って各地のマーケットで出店し、その中でタンザニア人会がつくられていく様子などを調べています。こうした組織が出来ているところも、過去には結成されたが現在は崩壊してしまったところもあります。崩壊には、中心者がお金を使い込んでしまったとか、あるいは組織の維持に積極的でなかったなど種々の理由があります。アフリカではタンザニア人会の存在を比較的多くの場所で認めることができます。

バンコクとか広州でもタンザニア人は集住していますし、誰がどこにいると分かっているわけですが、必ずしも組織にはなっていません。

広州の場合は、組織をつくって定期的に集まるということには、官権の目を恐れて消極的です。

組織の状態はさまざまでもタンザニア人がいつもやっていることは、タンザニア人が客死した場合への対応です。国外でタンザニア人が亡くなった場合には奉加帳を回して遺体を母国に戻すための寄付を同郷人から募ることは、組織がなくても、自発的にやってます。

竹中：ありがとうございます。会食をする。一緒にご飯を食べるというのは、恐らく今日のお話の中でも大きい。あるいは、宗教や冠婚葬祭。言語、教育、そして商売。このあたり人のつながりを大事にしていくことで、何々人とか、そういうふうにできてくるのかもしれません。フロアから何かあればどうぞ。

フロアB：今日のお話をうかがって、とても勉強になりました。特に面白かった点は、海外から来たり、居住したりする人々をどのようにアシミレート(同化)していくのかという側面です。それは、入ってくる人々の側にも、この人々を受け入れる側にも、それぞれ大きな重要な調整過程の問題でないかと思います。これに海とか港が関わっており、全体的に見れば、環流を繰り返すことになるのではないかと感じました。

竹中：ありがとうございます。人々がネットワーク的に結びつくには、訪れた人々が歓迎され、その結果多文化の共存や新しい宗教が持ち込まれるなど、いろいろなことがあるわけですね。しかし、今おっしゃったような統合とか同化という方向で一緒にやるよという方向ではなく、人々を切り離すという方向もあります。今日の話では例えば王国から近代国家へと国家のつくられ方が変化したこと。ある形のナショナリズムや、その他排斥運動などは、切り離す動きです。しかし、もっと結びつきたいという動きも、同時的・多角的に起こっていると思います。まだ時間はありますが、どなたか何かありませんか。

フロアC：弘末先生にお尋ねします。ヨーロッパ人と現地人、妻、妾というもの。これは日本のコンテクトでやったらとても面白い研究になると思います。こうした性モラル向上運動は日本ではなかったんでしょうか。

弘末：現地人妻妾についてご質問いただきましたので、合わせてこの総合討論で論点となっていることも含め、お答えさせていただきます。豊田先生からこういうような現地人妻妾がいるところは、必ず条件があるのではないかというお話が出ました。これは私もあると思います。東アジアでも、沖縄とか長崎では外来者と一緒に暮らす現地人妻妾がいました。そこでは商業活動を女性が担っていました。外来者と一緒に暮らすことで、商業活動網を発展させることができる場所では、こういう慣行が発達しうるということが言えるかと思います。

ご質問の日本におけるこうした慣行に対して、ヨーロッパで展開したような性モラル向上運動が起こったのかということですが、定かなことは言えませんが、日本でも第一次世界大戦後ぐらいですか、欧米の影響を受けた婦人運動が台頭します。ちょうど廃娼運動が展開し出した、そういう時代の流れのなかで起こったのではないかと考えております。

フロアA：豊田先生にお聞きしたい点があります。私自身はBeachcombersという言葉をよく知りませんでした。特に私は妻がオーストラリア人で、オセアニアはある程度知ってるつもりだったのですが、このコンセプトについて知らず、非常に勉強になりました。ただ、やはり専門がインドである関係から、オセアニアにおいてインド系住民や、華人の存在というものが非常にあるのだろうと思います。その共存がどんな感じなのか教えていただきたいです。

豊田：たぶん歴史が非常に新しいということが特徴だと思います。華僑に関してもかなり新しくて、目立って入るのは、せいぜいここ数十年じゃないかと思います。印僑となるともっと歴史が浅いです。理由はたぶんマーケットが小さいということが大きいと思います。島々のそれぞれが小さいので、華僑、華人もかなり人口が集中して多いところだけに進出しているというのが現状だと思います。

竹中：ありがとうございます。このあたりで締めていきたいと思います。何十万ものチャイニーズ系の方々、あるいはインド大陸系の方々が、世界中でいろんな活動をされている。またいろいろな国籍、民族、宗教の方々が動き回っているムービングの時代ですが、世界的には人々が定住している社会、あるいは国家、国境がある状態といったものをまだまだ引きずっています。そうしたこれまでの世界をどう考えていくのかということを21世紀海域学の1つの視点として考えるとすると、今日の皆さまの報告では、人をつなぐものとして空やインターネットもありましたが、人々は海を渡って移動して来たということが強調されていました。そして、近代国家より前の時代や、あるいは21世紀の脱国家みたいな状況までの時代、帝国主義や植民地、ナショナリズムなどの現象をめぐって、歴史的にも時期的にも国家が相対化されていく過程についても、さまざまなお話があったと思います。

そして、またムービング、移動する、という概念についてです。日本はそうでない人もいたのですが、やはり農業社会が中心でしたので、やはり定住した国民という発想がすっと入った部分がありました。しかし、今日のお話は移動、ほとんど海で活動する人々、あるいは、よそに行ってまた戻って来るなど、回遊する人々でした。今グローバリゼーションって騒いでいますが、ムービングという社会は今だけじゃない。昔からたくさんあったのだという観点がもう1つあったと思います。

そして、また大きく私たちがいろんなことを考えるときには、近代、現代の社会、いろんな言葉を引きずります。やはりその時代に強かった欧米の概念も使って考えることが多いのですが、今日は欧米ではない側の地域研究者の方が主体ですので、欧米が入って来てしまった側の社会を、あるいは欧米の人もあまりいなかったところから地球を見ますと、何が見えるのか。それを概念で攻め込むのではなく、様々な歴史やデータ、あるいは土地の言葉や出来事として、今日チャレンジしていただいたのではないかなと思います。

現在いろんな形できな臭い言説が多い。国際政治でも海の時代と大騒ぎしている時代です。今日お話にあった中国であれば海のシルクロード構想とか、あるいはアフリカからヨーロッパへの難民的な方々が海でたくさん亡くなっている。それらを欧米の視点から見る、そして、現在の状況をきな臭い側から見るというのもあるのですが、そういう時代の課題をオルタナティヴな視点からどう捉えて超えていくことができるのか。歴史を古くさかのぼり、あるいは見えてなかった、聞こえてなかった地域や人々のことをあらためて勉強していくことで、また異なる視覚からの課題への挑戦といいましょうか、アイデアが出て来るのではないか。そういうことが今日非常によく分かったと思います。

このセッションでは、「文明の衝突」についてのイスラームの話がありましたし、中国の脅威とかそういう言葉も登場しました。けれどもむしろ、そういう対立的ではない形での海の時代、あるいは古くからのグローバリゼーションの時代、そしてアジアを中核とした共存的な世界というものを考えていくための歴史的な知識について、非常に重要な勉強の機会をいただいたと思います。本当に今日はありがとうございました。皆さんもありがとうございました。じゃあここで総括討論の司会は、ここで終えさせていただきます。ありがとうございます。

上田：どうもありがとうございました。非常に濃密な議論であったと思います。それでは、総合討論が終わりまして閉会という形になります。最後までお残りいただいてどうもありがとうございます。

私、今回のシンポジウムでは目から鱗がいっぱい落ちたような感じです。非常にエキサイティングしました。一番心に残っているのは、最後に重松先生がおっしゃったストランド（もやい）という言葉です。海を渡って来た人が現地社会でどうやってもやうのか。そのもやい方というのは現地社会の特質によってももやえる場合もあるし、もやえない場合

もあると思います。もしかすると、「もやい」が海域学のプロジェクトの1つのキーワードになるかもしれません。そのようなことも感じながら今回のシンポジウム、ここで終えさせていただきたいと思います。本当に長い間、午前中から午後までどうもありがとうございました。

近世から近現代にいたる海域世界の社会統合